

祇園祭

中川 涼

(2019 年度入学 鈴木ゼミ 3 期生)

ここ数年コロナウイルスの影響で行われていなかった、京都の伝統行事がある。それが祇園祭だ。葵祭、時代祭に並ぶ京都三大祭りの一つ。そして、東京都の神田祭、大阪府の天神祭に並ぶ日本三大祭りの一つとしても有名な祭りである。今回はこのように京都だけでなく、日本全国から愛されている祭りについて紹介していく。

祇園祭は、毎年 7 月 1 日から 31 日までの 1 か月間、京都市内の中心部や八坂神社で行われる。クライマックスの山鉾巡行や神幸祭をはじめ、多彩な祭業で京都の夏を彩っている。このように 1 ヶ月もの期間を使って行われる大規模な祭りで京都市内外から多くの人々が訪れて賑わいを見せている。

今では京都府民であれば知らない人はいない祇園祭。そんな祇園祭はいったい、いつごろから何のために行われるようになったのだろうか。

祇園祭の歴史は平安時代にまで遡る。平安時代前期の 869（貞観 11）年、京で疫病が発生した際、広大な庭園だった神泉苑に、当時の国の数にちなんで 66 本の鉾を立て、祇園の神（スサノオノミコトラ）を迎えて災厄が取り除かれるよう祈ったことが始まりとされる。

応仁の乱で祭りは途絶えたが、1500（明応 9）年に町衆の手で再興された。以後、中国やペルシャ、ベルギーなどからもたらされたタペストリーなどを各山鉾に飾るようになった。これらの懸装品の豪華さゆえに、山鉾は「動く美術館」とも呼ばれる。江戸時代にも火災に見舞われたが、町衆の力によって祭りの伝統は現代まで守られている。2009 年にはユネスコ無形文化遺産に登録された。

祇園祭の目玉である山鉾巡行は本来、神輿渡御に伴う「露払い」の位置付けで、神幸祭に先立つ「前祭（さきまつり）」と還幸祭の「後祭（あとまつり）」がある。高度経済成長期以来、交通渋滞や観光促進を理由に、前祭と後祭の合同巡行が続いていたが、祭り本来の形を取り戻そうと分離が決定。2014 年、約半世紀ぶりに後祭の山鉾巡行が復活した。



ここまで祇園祭の歴史について紹介したが、1 ヶ月という長期間行われているこの祭りはいったいどのようなスケジュールで行われているのか。

7 月 1 日の「吉符入り」で幕を開け、2 日には山鉾巡行の順番を決める「くじ取り式」が京都市役所で行われる。10 日頃から前祭の鉾建てが始まり、12 日頃には鉾の「曳き

初め」がある。14日の宵々々山、15日の宵々山、16日の宵山を経て、17日は、前祭の23の山鉾が祇園囃子にのって京都のメインストリートを巡行する。

前祭山鉾巡行の翌日から、後祭に向けて鉾建てが始まる。21～23日は宵山期間で、24日は後祭の山鉾巡行。あわせて花傘巡行も繰り上げられる。夕方には、神輿が御旅所から神社に戻る還幸祭がある。先ほどから何度も出てきているが祇園祭の一番の見どころと言え、やはり山鉾巡行だ。

前祭・山鉾巡行当日午前9時、計23基の山鉾が四条烏丸を出発。四条通を東へ向かった後、河原町通を北上し、御池通を西進する。四条麩屋町での長刀鉾稚児による「注連縄切り」や、山鉾が各交差点で方向を変える「辻回し」などが見どころだ。

後祭・山鉾巡行当日は、午前9時半に計11基が烏丸御池を出発。前祭とは逆向きのコースを進む。復活した大船鉾や、前祭とは逆向きの辻回しなどに注目が集まる。後祭列が復活するまで長らく代わりとなっていた花傘巡行の行列も、後祭列を追うよう御池通や河原町通を進む。

私は京都で暮らし始めて3年目になるが、今年初めて祇園祭に行き、山鉾巡行を見た。多くの人々がその迫力ある山鉾の姿を一目見たいとコロナウイルスが流行する前ほどの賑わいを目の当たりにした。おそらく、京都府以外から来ているのであろう人も見受けられ、全国の人々がこの数年どれほどこの祭りを待ちわびていたのかを肌で感じた。巨大な鉾を人の力だけで動かし、京都の街中を回遊している姿は、まさに昔からの伝統を受け継ぎ、多くの人々を魅了しようとする祇園祭に関わる全ての人の熱い思いがあった。名前は聞いたことがあったが、実態は知らなかった祇園祭について調べ、実際に足を運ぶとこの祭りが人々にとってどれほど意味のあるもので重要な存在なのか、身を持って理解できた。本文を読んで初めて祇園祭について知った方はもちろん、以前から祇園祭を知っていて足を運んだことがある方も是非ここで知った情報を参考にし、足を運んでみてはいかがだろうか。



参考文献

- ・ 京都新聞 (https://www.kyoto-np.co.jp/feature/season/gion_history)
- ・ 京都デザイン (<https://kyoto-design.jp/special/gionmatsuri/yamahoko?t=1>)